慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済活動動機思想史概観
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1944
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.38, No.2 (1944. 2) ,p.65(1)- 110(46)
JaLC DOI	10.14991/001.19440200-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19440200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大學教授　高橋誠一郎著

最近經濟書解題

高橋教授の王城山莊は稀覯の經濟書の富を以て夙に著名である。大英博物館或は牛津大學ボッドリイ文庫に於てすら一本を藏するのみにして最稀と記されあるものが、事もなげに教授の机上に置かるゝを見るも稀としないのである。西暦一五八一年版の匿名人著「種々なる人々の有する目下の不平の簡略なる檢討」より一八四八年版ジョン・グレイ著「貨幣の本質及效用に關する講義」に至る三十五篇、年代は三百五十年間に亘り、收輯せられたるものは概ね天下の孤本にして而も悉くこれ經濟學史上重要なる一基石たり或は興味少しとせざる問題を提出する學界の珠玉である。之等初期國民經濟時代より、講壇社會主義或は歴史學派の先驅的著作に至る古書群は、茲に教授の周到稠密なる解題を施されて再び世に現れた。皇國獨自の經濟學體系の樹立せられんとしつゝある今日、最も有力なる參考資料たるを信ずるものである。

A5七三〇頁
價八圓四〇錢
送料　四五錢

東京都芝區三田二ノ一　慶應出版社　電話三田(45)二七九一　振替東京一五八一〇八

三田學會雜誌　第三十八卷　第二號

經濟活動動機思想史概觀

高橋誠一郎

文明社會に在つては、利得欲は往々にして人間活動の最強なる動機と看做されてゐる。然しながら、這般のものは、原始民の間に於いては、彼れ等を驅つて仕事に赴かしめる衝動力たることが稀れであると言はれてゐる。彼れ等は寧ろ種族的標準によつて課せられた一定の義務によつて促進せられ、若しくは、等しく慣習及び傳統によつて指導せらるゝ功名心及び價値觀念に鼓舞せられて行動する。蠻地に於ける白人が彼れ等自身の間に在つては最有效なる剩戴物たる利得欲に訴へて、土着民をして仕事に赴かしめんとして失敗する場合多く、是れが爲めに彼れ等を目して懶惰無性と做すは、己れを以つて他を律するに基くものであると稱せられゐる。(B. Malinowski, Argonauts of the Western Pacific and Primitive Economics of the New Zealand Maori, 1922, reprinted 1932, pp. 156–157.)。未だ分業及び交易の發生を見なかつた自足自給社會に於いては、經濟的報酬を期待して行はれる勞働の觀念は存

することがなく、偏へに封鎖的家族團體を維持するが爲めの勤勞の觀念が行はれてゐた。各人は、家族的自足自給の經濟生活を維持するが爲めに共同の仕事に從事して居つたのである。

ホメーロス時代の希臘は猶ほ著しく自足的であつた。ホメーロスの時代からして、大家族團體は崩壞して、小家族團體に分裂しようとする傾向が現れた。個人主義的精神は發生して、結束はあらゆる方面に於いて弛廢した。家族共同財産の唯中に私有財産は形成せられた。時代の推移に連れて、家産は愈々相續人の間に分割せられて、益々其の高を減少した。家内生産は、經濟生活上、猶ほ至る所に重要なる役割を演じては居つたが、而も、人々は、單に奢侈品のみならず、其の日常の必要品をも外部に求めなければならぬやうになつた。『仕事と暦日』の詩人ヘシオドスの眼に映じたものは、血族團體は崩壞し、神聖なる紐は切斷せられて、正義と勤勉の觀念は驅逐せられ、而して、人は共同體の自足自給の爲めに、其の堂然の義務として勞務に從事することを怠り、懶惰に耽り、利己心の發動に從ひ、不正の手段によつて富を獲得しようと意圖しつゝある世相であつた。彼れは其の父の死後、彼れと其の家産を分有した弟ペルセスに勸告するに、誠實なる勞苦によつて、自己の爲めに新たなる富を取得す可きことを以つてしたのである。「働く者は其の牧獸を增加し、其の富を增大するに至る。又、働くことによつて汝は神及び人によつて愛されることが著しく大となるに至る可きである。蓋し、彼れ等は怠惰者を憎むことが大であるからである。恥辱は勞働に在らずして懶惰に存する。而して、汝が勞働するとしたならば、直ちに、怠惰者は汝が富裕となるを羨むであらう。即ち、尊敬と名譽とは富と手を携ふ可きが故である」。（Erga kai Hemerai, 298 ff）。勞作は人間が如何なる運命の下に在るとを問はず、彼れに取つて最も合宜なるものである。働けば富み、富めば尊貴と榮譽とを伴ふ。富は詐欺的辯舌によつて取得せらる可きものではなくして、天の賜物として受領せらる可きものである。斯くて、彼れは肉體的勞働の高貴と重要性とを强調し、勞働の生涯を以つて、永續的繁榮を得可き唯一の根元であると主張する。（ibid., 298-316.）。洵に、ヘシオドスの生活理論の主調は仕事である。而も、仕事は經驗の訓ふる所によつて指導せられなければならぬ。是に於いて乎、ヘシオドスはボエオチアの農民の爲めに其の必携便覽を編述したのである。而して、彼れの詩篇は實に、私的享有地産の發生、植民による自由借地小農民の增加、商貨及び工業産物に對する需要の增大（ボエオチアの借地農の間に於いてすら）、及び富に對する自覺的憧憬の增加が、家族的自足を目的とする勤勞をして財富獲得の爲めの勞働と化せしめつゝあつたことを物語るものである。彼れが農民に向つて强固なる船舶に其の船荷を託す可きことを勸告し、而して、逆風の難さへなかつたならば、船貨にして愈々大ならんか、毎次の利得は愈々大なる可きを說いて居るに徵しても、（ibid., 641.）、當時の農民が單なる家計獲得の爲めに農牧の業に從事して居つたものでないことが明かであらう。

既に農業の經營は自足自給の域を脫して、販賣を目的とするに至り、貨幣經濟は自然經濟に代らうとしてゐる。人生哲學を有する政治家であつたソローンは、吾人に傳存する三百行足らずの歌詞中の一に於いて、アテナイに於ける商業發達の結果として、市民自ら富神の招きに應じて、愚かにも、偉大なる都市を破壞せんとしつゝあるを警告した。彼れは、富の追求によつて一切の職業に危險を伴ふに至つたことを痛感した。「富の追求に際しては、何等終局の目的も、明確に人々の眼前に置かれることがない。吾人の中に在つて、現在最も多くの資産を有する者は、更らに其れ以上を獲得せんが爲めに前に倍せる努力を行ふ。如何なる富か、能く總べての人々を飽滿せしむるを得可き。洵に、利得は、神々から人間への賜物である。然しながら、ヅェウスが膺懲を行はんが爲めに之れを送つた場合には、此の利得からして「破壞」の因となる可き愚擧は發生して、種々なる人々の上に降るのである」。

(Theodor Bergk, Poetae Lyrici Graeci, II, 1915, Frag. 13.)。ソローンは又、何等の職業にも從事することのないものに對して刑罰を課したと傳へられてゐる。而して、彼れに先き立てる立法者ドラコーン及び彼れの後に現れた僭主ペイシストラトスの兩者も亦、同樣の法律を制定したと信ぜられてゐる。若し果して、傳說の傳へるが如く、アテナイに於いて斯くの如き立法が行はれたとするならば、殊にソローン其の人によつて行はれたとするならば、其の主意は、怠惰の倫理的非認よりも、寧ろ貴族等に屬する懶惰にして危險なる從者を制限せんとするの欲求に在つたのではないかと想像せられてゐる。彼れは、實に、彼れの憲法によつて、王權の廢止以來政權を獨占し農民及び技工の上に立つて居つた貴族即ちエウパトリダイの特權を廢止し、支配階級として認められるが爲めには一定額の財產所有を必要とする寡頭政治の一定形態の下に國家を置けるものであつた。彼れの憲法の精神は富を以つて家系に代へて參政權の基礎たらしめようとするに在つた。是れに由つて、總べてのアテナイ人は、其の富の程度を增加するに由つて、より高い身分に昇ることが出來た。テテス階級即ち年收百五十メディムノイ以下の賃銀勞働者より成る第四階級から、ヒペイス階級即ち年收少くとも三百メディムノイを有する騎士より成る第二階級に昇進したものもあつた。

アテナイは、其の商業的發展の時代に於いて、大資產が少數者の手中に集積せられつゝあるを見た。幾多の財貨が貿易商から取得せられるやうになるに連れて、小商人及び小企業は其の獨立を失ふものが多くなつた。而して、奴隸勞働による製造場の設立は幾多の自由手工業者を疲弊せしめたばかりでなく、斯くの如き工場に於いて、多數の奴隸が、被放民の指揮を受けて勞作しつゝある光景は、勞働に關する一般思想を惡化せしめなければ已まなかつた。曾つては、富裕なる貴族階級が侮蔑の眼を以つて手工業者及び農業勞働者を觀たに過ぎなかつたのであるが、今や、全般の自由民は奴隸勞働によつて行はれつゝある業務に對して嫌惡の念を抱くに至つた。無爲にして生活することの出來る者は、自ら其の業務に携はることのない有閑階級化せんとするの傾向を現した。而も、他方に於いて、資本主義的發達は又、必然、貧民の數を增加し、其の生活難を助勢しなければ已まなかつた。彼れ等は安逸遊惰を求めて、而も、現實の窮迫に惱まなければならなかつた。多數の自由民は、窮迫に驅られて、奴隸に等しい下賤なる業務に從事しなければならなかつた。懶惰と貧困、富裕なる市民階級の發達と之れに對應する民衆の疲弊に其の端を發した階級鬪爭が熾烈となつた時、民衆は往々にして不正橫道を以つて富貴利達の道と思惟した。盲目の富神プルートスの常に訪れる所は極度の吝嗇と貪慾とを以つて聞えた者の家である。自餘一切の物に就いては、人は飽滿の域に達することがあるが、而も、吾人は如何なる場合に於いても、未だ富に飽きた者のあることを聞かない。シラクーザの煽民政治家は民衆に向つて「富の平等が自由の本原であることは、恰も貧困が隸屬の端緒たるが如くである」と叫んだ。之れに對して、かのアリストファーネスの喜劇詩『富神』中に現れる「貧乏」は、「富を平等に分配す可しとしたならば、何人と雖も、孜々として業務に精勵し若しくは技術を修得しようとする者は存しないやうになるであらう」と主張しなければならなかつた。勤勉は富に對する欲望から生ずると做すの觀念は、當時に於いて、相當に根强いものとなつて居つた。（昭和四年版拙著『經濟學前史』五七—六三頁參照）。

斯くの如き時代に生を享けた大哲プラトーンは、富が目的ではなくして、手段であることを力說した。而して、彼れに從へば、一般庶民が普く是れを以つて第一位に置くは、國家及び個人に取つて共に幾多の害惡を生むの原因である。（前揭拙著八七—八八頁參照）。斯くて、過度の營利的精神を排斥し、市民が不當なる貨殖を計るを至難ならしめて、財產上の不平等の發生を防止しようと努めたプラトーンは、其の『法律篇』に於いては、實際上、市民

に對して一切の貨殖業を許さざらんことを期した。商業及び工業の如き、孰れも皆、然るものであつて、是れ等の業務は居留民及び外來民をして之れを行はしめ、而して、護國者は利潤の割合を決定す可きものである。（前揭拙著「五七頁」）彼れは又、富及び貧の兩者を以つて技術衰退の二原因たるの觀あるものと做した。一陶工が富裕となる時は、彼れは最早其の技術に同樣の苦心を拂ふことなく、愈々益々懶惰且つ不注意となる可きである。之れに反し、彼れにして若し何等の貨幣をも有することなくして、道具其の他彼れの技術上の所要物を備へることが出來ないならば、彼れは彼れ自身等しくよく仕事を行ふことなく、又等しくよく仕事を行ふことを其の子等若しくは弟子等に敎へることもないであらう。（Rep., IV. 421D－E）。更らにプラトーンは、貧困なる國民は富裕なる國民と戰つて利あらざる可しと做すの意見に反對して、前者は勇敢なる戰士を有し、後者は無能なる富者より成る軍隊を有す可きであると說いてゐる。其の技術に於いて完全に訓練せられた單獨の拳鬪家は、之れに關して何物をも知らざる二人の肥大にして裕福なる紳士の好敵手たることが容易であらう。（Rep., 422B）。

彼れの弟子アリストテレースも亦、富は目的に對する手段の集合であつて、其の目的は欲望の滿足に存するが故に、富は人間の主たる目的たることを得ざるものであると論じた。善良なる生活の爲めに要せられる財產の高は無制限なるものではない。純眞なる富は善良なる生活に資するものである。而して、自然に從へる富は無限ではなくして、各箇の場合に於いて極めて明確なる定限を有する。そは或る者をして生活上の主たる諸目的を取得せしめる以上に出づ可きものではない。何等の定限なきものは唯り蓄財家の富あるのみである。實に、眞の富は家若しくは國家の爲めに役立ち得る財貨の集團である。斯くて、吾人は又、家長及び政治家によつて實行せられる一種の自然的取得術の存するを見るのである。アリストテレースは、自然の計畫に對する其の本然的一致を標準として、農耕、牧畜、狩獵、漁撈、養蜂及び之れに類するものを、不自然なるもの、即ち工匠、日稼人、商人及び小賣商並びに金貸の業務と著しく相違せる水準に立たしめた。彼れは洵に、勞働を以つて富の能動的元質と認めることなく、地、水、空を以つて富の眞源泉と看做し、而して、他人の爲めに自己の勞働を提供して貨幣を取得するを以つて、不自然なる取財術中に伍せしめたのである。然しながら、取財術中の最良なるものゝ續行と雖も、彼れを以つて觀れば、自由民に取つて不適當なるものである。自然なると不自然なるとを問はず、必要なる任務は、德の發達に不利なるものであつて、更らに高尙なる事物の路を塞ぐものである。是れ等のものは必要ではあるが、高貴ではない。必要なる行爲は高貴なる行爲、即ち其れ自體の爲めに望ましいものであつて、或る他のものゝ爲めに望ましいものに非ざる行爲の缺く可からざる條件であるが故に然るのである。斯くて、啻だに純然たる器械的技術のみでなく、總べての必要なる業務は、其れ自體の爲めに望ましい他の活動形態の爲めに存するものである。而して、アリストテレースは、必要なる職務と高貴なる職務とは、畢竟、最も優れた國家に於いては、別箇の人々に委ねられなければならぬものと觀る。彼れに從へば、必要なる職務を遂行する階級が高貴なる職務を遂行する者に對する關係は、唯だ一つに從屬あるのみである。前者が國家の內に存在するは、其の存在なくんば、後者が存在すること能はざるが故である。彼れ等の存在は已むを得ざるの必要に基くのである。アリストテレースの理想的國家の經濟的下部構造は、大部分、希臘人以外の資料を以つて形成せらる可きものである。而して、彼れは單に「必要なる仕事」から市民を引き離すのみを以つて滿足しないで、「利得の術」に墮した「取財の術」を淨化して、其の眞個の限界及び方法を意識せしめようと努めた。良國市民の生活は貨殖營利の生活を排除しなければならぬ。低劣なる社會的活動をして高貴なる其れを蔽ひ、之れを抑止することなからしめ、而して、人間生活の目的の誤認から生ずる營利

心を鎮靜するの策が講ぜられなければならぬ。斯くの如きは、蓋し、個人的自主的傾向の發生に由る政治的頽廢に反抗して、既に動搖を來して居つた團體的生活の理想を合理的基礎の上に建設せんことを企圖せる者の當然行はなければならなかつた所のものである。アリストテレースの企圖する所は、其の國内に於いて「必要なる活動」は能ふ限り少なく、「高貴なる活動」は能ふ限り多く存在するの餘地あらしめやうとするに存する。「取財術」（クレマチスチケ）を統制して、之れを成就するは、「經濟術」（エコノミケ）の職務の一である。家計は德及び幸福の爲めに設けられた限界内に財貨の追求を制限することを知つてゐる家長の權威の下に置かれなければならぬ。（前掲拙著一六二―一八一頁參照）。

プラトーンと等しくソクラテースの弟子であり、キレネ學派の祖であつたアリスチッポスは、徹底せる快樂主義を主張し、人生唯一の目的を以つて快樂であると做した。爾餘一切の物は單に這般の目的を實現するの手段としてのみ價値あるものである。而して、此の學派の後繼者であり、エピクーロス學派の創設者であるエピクーロスは、人世の目的は幸福であり、幸福は快樂に存すると觀た。而も、彼れは、精神的快樂及び苦痛を以つて、肉體的快樂及び苦痛とは比較することが出來ない程大であると思惟した。斯くて、至高の快樂は心的平靜に存する。名譽及び富に對する渴望を除去せる感覺的精神的享樂生活は實にエピクーロス主義的賢者の生活理想である。彼れの所謂幸福は單純且つ愼重なる生活を營むに在る。精神的富は無限である。而して、賢者は容易に取得し得る物を以つて滿足する。自然によつて要求せられる富は限定せられ且つ容易に取得せられる。無益の想像によつて要求せられる其れは無際限に延長する。（Epicurus: The Extant Remains, trans. C. Bailey, 1926, p. 99.）。エピクーロスは、感覺的衝動の制壓を要求することなく、又、富裕なる生活を營むことを禁止しようとすることもなかつたのであるが、彼れは更らに熱心に、人は斯くの如き事物に自己を依存せしむることなかる可きを主張したのである。要は用ふること少なきに非ずして、求むること少なきに在る。「汝若しピュトクレースをして富ましめようと欲するならば、彼れに更らに多くの貨幣を與へることなく、彼れの欲求を減少す可きである」。（ibid., p. 127.）。肉體は飢渴と寒氣とから救はれんことを叫ぶ。而も、或る人が這般の安全を得、而して、之れを得んことを希望するならば、彼れは幸福に於いてヅェウス神にすら匹敵するを得可きである。（ibid., p. 111.）。洵に「我れに麵麭と水とあらば、我が幸福は神々に讓らず」と觀ぜられた。最も單純なる食物は、快樂の爲めにも、健康の爲めにも、共に最良のものである。僅小を以つて滿足しない者は、總べてを以つてして猶ほ滿足しないであらう。多くの人は、彼れ等が富を獲得した時、彼れ等の不幸から脫出するの道を看出さないで、單に更らに大なる不幸への變換を看出したに過ぎない。獸にふさはしい職業によつて夥しい富は蓄積せられるが、其の結果としてみじめな生活が生ずる。（ibid., p. 137）。斯くの如き思想は、此の學派の倫理觀より生ずる當然の歸結たると共に、一面に於いては、富者に對する誅求及び迫害甚しく、彼れ等の地位が極めて不安固であつた世相を反映するものであり、他面に於いては、政治的狀態の不安定、都市的國家の衰滅、參政權の消滅が希臘人の愛國奉公の念を薄弱ならしめ、市民をして著しく自己中心的ならしめた時代を表現するものとも觀ることが出來よう。

キレネ學派に對立せるキュニイクの學派の始祖アンチステネスに從へば、最小可能なる欲望を有し、斯くて又、能ふ限り自己中心的であり、あらゆる外部的轉變から獨立せるものは、最も眞正且つ唯一の合理的にして有德なる生活である。ヅェウス神が巨人プロメーテウスを禁縛したのは、彼れが人間の福利の增進を蔑視したが爲めではなくして、此の巨人によつて行はれた火の發明が、文明の種子を蒔き、人間に取つて一切の優柔と奢侈の根原となつた

が故である。德によつて伴はれない富は、啻だに無價値であるばかりでなく、又、不善の根原である。殊に、快樂は善と看做され、勞働は惡と認められることの最も少ないものである。蓋し、快樂が或る人を支配するの原則となつた時、そは其の人の破滅を來さしめ、而して又、勞働は彼れを敎化して德に導くが故である。アンチステネスと其の學徒に取つて倣ふ可き典型たるものは、かの神話中の最大英雄ヘラクレースの勤勞苦鬪の生活である。斯くの如き奮鬪的氣力の理想に對して障害たるものゝ權化はプロメーテウスである。（前揭拙著八三—八五頁）。キュニィクの流を傳へて之れを超出し補足したストア學派に取つては、物質世界、並びに富及び力と云ふが如き事物は賢者に取つて無關心を以つて對接せらる可きものである。彼れ等は不動心（アパティア）から發出する嚴肅なる生活を强調した。此の學派に屬するクリュシッポスに從へば、賢者のみ唯り能く外物を正しく使用するの力あるが故に、彼れ等のみ唯り眞の富者である。（前揭拙著九四—九九頁）。ストア哲學は小なる都市的國家の拘束を脫却して、個人的生活の完成に向ひ、而して又、世界的國家の理想鄕を夢想せるものであつた。彼れ等は國家的若しくは私的見地よりする富及び之れを生產する勤勞に關する積極的理論を發達せしめることなくして終つたのであるが、斯學派の自然法學說は第十八世紀に於ける經濟學成立の時代に於いて之れに對して多大なる影響を與へることゝ爲つた。

二

前述せる「賢者のみ唯り能く外物を正しく使用するの力あるが故に、彼れ等のみ唯り眞の富者である」と倣すストア哲學者流の思想は羅馬人の間に入つて、キケロによつて特に著明となつた「聖賢のみ富む」と云ふ金言を生んだ。（Cicero, Paradoxa, 6.）。而して、あらゆる人類を結んで一個の理性的團體たらしめんとする此の學派の世界的國家理想は今や羅馬人の間に移つて其の現實なる世界的帝國の理論となつた。其の政治哲學をストア哲學者パナイチオスに負ふ所の大であつたキケロは「各個人の利益と國家全體の利益とを同一視するを以つて、萬人の主要目的たらしむ可きである。蓋し、個人が、共同の福利に供用せしめらる可きものを利己的目的に充當したならば、あらゆる人間社會は破壞せらる可きが故である」と稱した。（Cicero, De Officiis, iii. 4.）。而して、營利的業務に對する貴族階級的偏見は外觀上極めて强く、唯り農業に關してのみ夙くからして大なる注意が拂はれて居つたが、商工業は概して自由市民の携はる可からざる賤劣なる業務と看做されてゐた。キケロは、職業に關する當時の意見を概括してゐる。（ibid., i. 42.）。（前揭拙著一八七—一九〇頁參照）。キケロは實にストア哲學的思想を基督敎會の敎父に、斯くて又、中世の神學者に、傳達するに資する所大なるものであつた。

ストア哲學者であり、羅馬皇帝であつたマルクス・アウレリウスは、神的目的との自意的共働に幸福を看出す可き理性的存體の義務の觀念を基礎として利己的目的の追求を排斥し、他人の幸福の能動的追求を强調した。彼れ曰く、「恰も一つに統一せられてゐる身體に在つての四肢に於けると等しく、分離して存在する理性的存體に於いても亦、然るものである。蓋し、是れ等のものは、一つの共同作業の爲めに構成せられたものであるからである。而して、汝が、自分は理性的存體の體制の一肢體（メロス）であると自分自身に對して屢々言ふならば、此の觀念は汝に一層明白となるであらう。然しながら、汝は自分が一部分（ケロス）であると言ふならば、汝は猶ほ汝の心から人々を愛することがないのである」と。（Marcus Aurelius Antoninus, Ton eis heauton biblia, vii. 13.）。彼れは又、吾人が奢侈及び虛飾の生活に捕はる可きでないことを敎へた。（ibid., vi. 13.）。

然しながら、斯くの如きストア哲學的見解が、其の最盛期に於いて特に著しく商業主義化にせられた羅馬帝國內の一般的意見を充分に反映するものであるとは固より信じ得ざる所である。

三

羅馬に於いて商業主義的精神に對して與へられた承認の範圍と比較せらるゝの時、中世は確然反對の方向に轉廻せるの觀がある。羅馬に於いては、戰勝と征服と領土の擴張の持續せる限り奴隷制度が榮えてゐた。羅馬人は被征服者から其の土地の一部を强請するの常であつて、斯くして沒收せられた土地は、一と先づ國家の手に歸し、而して、其の大部分は、羅馬市民及び其の伊太利亞同盟者中の富者が低い名のみの地代を支拂つて之れを占有するに委せられた。斯くして、大農場（latifundia）は徐々に發達を見た。羅馬人は固と家族維持の目的を以つて其の地產を經營せるものであつた。然るに、大農場はカルタゴの營利的農場を典型とせる利潤を目的として經營せられる資本的地產であつた。長期に亙つたカルタゴ戰役は、市民階級及び伊太利亞同盟者中の體格優れた小農民の大なる部分を軍務に從事せしめた。是れに由つて生じた利用し得可き土着農業勞働の不足を補足するが爲めに、大地產の所有者及び借受人は、不斷の戰爭に於いて捕虜となり、奴隸として賣られた者の勞働を使用するに至つた。數次の戰役は次々に多數の新たなる奴隸を供給した。而も、屬領開發の時期は終らざるを得なかつた。捕虜の賣却による低廉なる奴隸の無限の供給は減少した。是れが爲めに、一方に於いて殘存せる奴隸に對する思ひ遣りを增加せしめると共に、他方に於いては、隸民制度の起る以前に於いては、自由の手工業者、借地農及び店商人の階級を增加することゝなつた。熟練勞働者並びに熟練奴隸をすら出現せしめたことは又、斯制度の弛廢を來さしめるに與つて力があつた。蓋し、特殊の能力を有する奴隸に對し、其の仕事に一定の利害を有せしめ、彼れ等に一層良好なる生活條件を供し、其の獨立の程度を大ならしめ、且つ少くとも其の自由を購ひ得るの可能性を與へることが必要となつたからである。

中世に於いては農民は領主に對して諸般の勤務を提供し、且つ慣習によつて幾多の拘束を受け、又、耕作强制の實が存して居つたが爲めに生產の效果を充分に擧げることが出來なかつた。領主制度の下に於ける農業經營は全く營利の觀念に支配せられざるものであつて、生產に餘剩のある場合には之れを市場に提供することがあつたが、それは單に偶發的の事實に過ぎなかつた。單に農業のみならず、商業及び工業も亦、營利の手段として目せらるゝことなく、這般の經濟行爲は社會上に於ける其の地位を維持するの目的を以つて行はれた。然しながら、自利的動機は中世的社會構造內に於いて絕えず作用しつゝあつた。

奴隸制度の崩壞と共に、勞働を以つて特殊の尊嚴と價値とを有するものとなすの傾向は次第に增加した。「隸民は奉仕するが爲めに生き、而して、生きるが爲めに奉仕する」（der Eigene lebt, um zu dienen, und dient, um zu leben.——Sachsenspiegel, ii. 108.）と云ふ古諺は次第に事實と一致を缺くやうになり、隸民と雖も、自己の權利に於いて財產を取得し維持することが出來るやうになつた。軈がて莊園所屬の手工も其の跡を絕つに至つた。任意自由に提供せられる勞働給付は、强制勞働に代つた。手工は最早他人の役務に勞作することなく、自由契約の下に一定の對價に對して其の勞働力を提供するに至り、而して、彼れ等が相結合して其の權利及び利益を保護し伸張するの目的を以つて彼れ等のギルド、即ちツンフトを組織して封建的領主に對抗し得るに至ると共に、彼れ等の職業の誇りは大となり、新たなる職業道德は生じ、自己の勞働を尊重するの念は增加し、勞働に依つて取得せる富を正當視するの傾向は强化せられなければならなかつた。而も、彼れ等によつて尊重せられた勞働は一般勞働ではなくして、斯道の專門的勞働であつた。而して、都市の工業が發達して其の市場益々廣大となるに連れ、愈々資本投下の機會は增加せられ、投下資本の收利力を增すことなからしめんとするの念は、獨占の精神を喚起し、ギルドは其の

工業管理の權を利用して幾多の規制を設け、新來の競爭者を阻止するに至つた。

商業の發達が未だ幼稚であつた時代に確く歐洲の民心を把捉し、爾後、漸次貴族的傾向を增加し來つた基督教會は都市に於いてギルドの勢力が强大となるに及んで、其の態度を變じて斯制度の忠實なる支持者となつた。職業に對する其の無關心は或る程度まで緩和せられた。教會は都市に於ける商業的生活を統制して、基督教的原理に背反するの所爲を防止するに努めた。中世の市民は、優秀なる貨物の生產地として其の都市の名聲を維持するの必要を熟知して居つた。彼れ等は產業的精神にして何等の支配をも受けることがなく、自由に發動することを許されるとしたならば、彼れ等が認めて以つて其の共同的社會最善の利益と看做す所のものを危ふからしめるに至る可きを十分に意識して居つた。

基督教は初めは貧民の宗教であり、最初の基督教團は農夫、漁夫若しくは手工から成るものであつて、不動產所有者の如きは彼れ等の間に於いて看出されることが極めて稀れであつたに拘らず、彼れ等は單に生計の手段として、又教團の經濟的窮乏救濟の手段としてのみ仕事を行はんとし、勞働の尊嚴を認めようとはしなかつた。舊約聖書は「汝は面に汗して食物を食ひ」云々と說いて居つた。（『創世記』第三章第十九節）。新約聖書は「貧者に施さんが爲めに勵みて手づから善き工を作す可し」（『以弗所書』第四章第二十八節）、「已れの事を行ひ、手づから工をなし」云々（『帖撒羅尼迦前書』第四章第十一節）と教へた。使徒パウロは『テサロニケ人に贈れる後の書』に於いて、彼れの徒は自らテサロニケ人等の間に在つた時、價なくして人の麵麭を食することなく、却つて彼れ等の一人をも煩はさざらんが爲めに晝夜勞苦して飽を彼れ等に示したことを說いた。彼れは「人若し働く事を否まば、亦、食す可からず」と命じた。然るに、彼れは彼れ等の間に於いて、妄りに歩んで、何の業をも行はざる者のあることを傳聞した。是に於いて乎、彼れは斯くの如き者に對して靜かに働いて已れの麵麭を食せんことを主耶蘇基督に託つて命じ且つ勸めたのである。（『帖撒羅尼迦後書』第三章第八—十二節）。何人と雖も、已れの爲めに生き、已れの爲めに死する者はない。我れ等は活くるも主の爲めに活き、死するも主の爲めに死する。（『羅馬書』第十四章第七、八節）。職業に關しても、我れ等は唯だ「召されし召にかなつて行」ふの外はないのである。（『以弗所書』第四章第一節）。パウロは勤勉を奬勵すると同時に、其の報酬たる財貨の領有を是認した。洵に、彼れは『テモテに贈れる前書』中に於いて、聖書は錄して「穀物を碾す牛は口籠を掛く可からず、又、働く者は其の値を受く可きなり」と云へる旨を說いてゐる。（『提摩多前書』第五章第十八節）。然しながら、同書は又、「我れ等は何をも携へて世に來らず、亦、何をも携へて往くこと能はざるは明かなり。夫れ衣食あらば、之れをもて足れりとす可し。富まんことを欲する者は誘惑と惡魔の罠とに陷り、人を墮落と滅亡とに沈むる愚にして有害なる種々の欲望に陷る。即ち、利欲は一切の惡事の根なり」と說くものであつた。（同書第六章第七—十節）。

基督教旨は、個人の前に無窮の前途を展開し、永遠の希望によつて之れを鼓舞し、以つて勤勉と活動とに對する衝動を與へたが、而も、基督教會は個人に對して絕對的服從を要求し、個人的利益は全然團體的利益に從屬せしめられた。現世に於いて、個人的自由と自己表現とを奪はれた人々は、唯だ一向に死の彼方なる生活に憧憬した。彼れ等は往々遁世によつて永遠の天惠を享受しようとした。然しながら、彼れ等と雖も、固より全然社會的衝動を抑制することは出來なかつた。彼れ等は僧院團體を組織した。僧院生活と禁欲主義とは、教會と國家との融合から生じた准政治的なる專制的教會に對する自然的反動の結果であつた。僧院は宗教的基礎の上に建設せられ、宗教的動機によつて鼓舞せられる產業的共同團體の典型を與へるものであつた。僧院の內部に於いては、如何に分勞が複雜

に行はれたとしても、之れを構成する各員は自己の利益の爲めに勞作するのではなくして、此の小共同團體を維持し發達せしめるが爲めに盡瘁するものであつた。宗教的要素は其の存在の核心であつて、勞働は夫れ自體に於いて何等の價値をも有するものではなかつた。而も、組織的經濟生活としての僧院の成功其の者は之れが宗教的性質を脅すものであつた。多數の僧院は卓越せる工業團體となつた。而して、交易の發達によつて開かれた新機運は僧院生活の性質を變化させなければ已まなかつた。財貨の購入を行ひ得るに至つて自足自給的共同團體たるの實は失はれた。分勞の機會は增加して、農業的勞働は隷民若しくは半隷民に委ねられ、其の他の部門の筋肉勞働は大部分講中の俗人の手に遂行せられて、修道僧は次第に其の力を文學、美術及び寫本の方面に專らならしめるに至り、通常の肉體的業務は彼れ等の日常生活上重要なる地位を占めることがないやうになつた。而して、中世後期に至つて、僧院が經濟的に最善なる效果を擧げることが出來ないやうになつた時、都市的生活と都市的制度とは非常なる發達を遂げるに至つたのである。

四

産業的活動を奬勵するの意見は加特力教的文獻中に存せざるものではなく、又、基督教理は、勞働を以つて、其の本質が基督教的精神と調和するものであるならば、必要であり、俯仰天地に愧ぢざるものと觀たのであるが、而も、そは其れ自體に於いては何等積極的意味のないものであると看做した。斯くの如き基督教理は宗教改革の起るに至る迄は何等の根本的變化をも受けることがなかつた。基督教徒は、上述せるが如き條件に從つて、彼れが從事しつゝあるあらゆる職業に於いて正しく生活す可きものであると思惟せられて來た。マルチン・ルッターの見地は之れと多く異なることのないものであつた。然るに、ジャン・カルヴァンは商工業の重要なる所以を認め、其の合法性と價値とを强調するに躊躇することがなかつた。彼れ並びに英國の獨立教派及び清教派は勞働を以つて個人が其の仲間に對して負ふ勤務であると信じた。勞働は個人に生計の資を供し、恐らくは又、病める者若しくは老いたる者を介抱するが爲めに使用せられ、又は或る他の方法に於いて一般的利益の爲めに使用せられることが出來、又使用せられなければならぬ餘剩を與へる。彼れ等の見解に於いては、勞働は又、修練でもある。勤勉なる人は一個の基督教徒に適應する平靜なる良心を有する。而して、彼れが其の勞働を不斷に行ふの單なる事實は、彼れを幾多の危險なる現世的誘惑から防護し、其の考へを虛榮と罪業とから離隔する。（cf., Richard Baxter, A Christian Directory: or a Sumn of Practical Theologie, and Cases of Conscience, 1673, p. 449.）怠惰なる人々が存することがなかつたならば、惡魔は其の爲す可き所業を殆んと看出すことがなかつたであらう。仕事を行ふことのない者は彼れの社會的負擔の配分を擔ふことを怠ると共に、又、自己を誘惑に曝すものである。富者と雖も、一の職業に於いて勞働することを免るゝものではなく、寧ろ愈々多く勞働するの義務あるものである。蓋し、神よりして最も多くの「賃銀」を受くるものは、最も多く働かなければならぬからである。（ibid., p. 448.）個人は日常の生活に於いて規律正しく神の榮光の爲めに働くことによつて最もよく神恩に浴するの狀態に到達することが出來る。斯くして、勞働に對し、勞働の産物に對し、最後には又、富に對しての尊重は日常生活中に導入せられたのである。彼れ等は固より『提摩太前書』第六章第十節を引用して、「財を慕ふは諸々の惡事の根なり」と說くことを怠らなかつた。（ibid., pp. 218, 220.）而も、富は享樂の手段としてゞはなく、神の嘉納する生活方法の保證として價値あるものとなつたのである。『箴言』第二十三章第四節は「富を得んと思ひ煩ふこと勿れ」と說いてゐる。而も、其の意味する所は、汝は富を以つて汝の主たる目的だらしむ可からず、吾人の肉體的諸目的の爲めの富は究竟的に意圖せられ

若しくは追求せらる可きではないと云ふに存する。而も汝はより高き事物に從つて、卽ち、汝の成功と正當なる利得に資すること最も大なるが如き方法に於いて勞働するを得可きである。汝は肉慾と罪惡の爲めには富まんとして勞働するを得ざるものであるが、神の爲めに富まんとして勞働することが出來るのである。（ibid., p. 450.）。俗物達や肉慾主義者等が爲すが如く、肉慾に備へ且つ之れを維持し、又、他に誇らんが爲めに富を欲求するは罪惡である。然しながら、吾人の勞働の結果たる正直なる收穫及び準備の爲めに勞働するは罪惡ではなくして義務である。斯くして又、善を行ひ且つ貧民を救濟し得可き有利なる職業を選むは罪惡ではなくして義務である。玆に前揭『以弗所書』第四章第二十八節は引用せられる。（ibid., Pt. iv, pp. 146–147.）。第十七世紀に於ける有名なる英國神學者アイザック・バーロウ（Isaac Barrow）は、勤勉を以つて、或る顯著なる善の遂行又は達成を目的とせる或る一定の正當、誠實、有用なる計畫の實施に於ける吾人の活動的諸能力の嚴烈なる行使と結合せる心意の愼重且つ堅實なる努力と解した。「例へば、富を取得するが爲めに絕えず其の業務を營むに餘念なく又忙はしき商人は勤勉なるものである」。（Barrow, Of Industry, p. 3.）。勤勉は神の望む所である。固より總べての賜は神より出づるものではあるが、而も、彼れは吾人が働いて是れ等のものを取得することを欲する。是に於いて乎、吾人は勤勉でなければならぬ。

マックス・ウェーバーは一千九百〇四—五年、其の編輯する Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. に Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus. の題目の下に論稿二篇を公にして、新敎、殊に淸敎派的形態に於ける其れは、資本主義精神を形成し斯くて又資本主義 其の者を形成するに於いて頗る大なる影響を有したと做す今日に於いては廣く主張せらるゝ意見を提唱した。（此の論文は彼れの Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie. 中に收められてゐる）。然しながら、ヴァーナー・ゾムバルト（Werner Sombart）はカルヴァン敎派・淸敎派的倫理の非資本主義的傾向を論證するに努め、（cf., Der Bourgeois. Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen, 1913.）、而して、ロバートソン（H. M. Robertson）も亦、ウェーバーの意見を否定し、宗敎改革以前に於ける加特力敎神學者と宗敎改革以後に於ける新敎神學者の富並びに商工業の問題に對する態度に於いて相違する所なきを論述せんとした。（Aspects of the Rise of Economic Individualism. A Criticism of Max Weber and his School, 1933.）。ロバートソンを以つて觀れば、ヴェーバーは、カール・マルクスによつて歷史の經濟的解釋に於いて唱道せられた所とは反對の因果關係の連系を確立しようと試むるものである。彼れは經濟的事象の心理學的決定を求めた、特に、彼れは「資本主義」の發生を「資本主義精神」の發生の結果として觀た、と論ぜられた。（ibid., p. xii.）。吾人は固より玆に此の論爭に深く立ち入らうとするものではない。ホイットテーカー（Edmund Whittaker）の言ふが如く、因果關係は圓形である。二箇の要素の間に一定の關聯を看出して、其の一が原因であり、他が結果であると論結するは常に危險である。北方歐羅巴に於ける商業的精神の漸增は此の地域に於ける宗敎改革の成功を來さしめるに資する所があつたであらう。而も、新敎は又、當時の商業主義的及び工業主義的方向への移行を助けるものがあつたであらう。新敎以外の他の原因、政治的及び軍事的安固、氣候、地理的要素、自然的資源及び社會組織も亦、可能なる原因として相共に此の地域に於ける資本主義の發達に混成作用を爲せるものと稱せらるゝを得可きであらう。（A History of Economic Ideas, 1940, pp. 88–89.）。淸敎主義を以つて資本主義の敵と觀てゐるゾムバルトも、淸敎主義が總べての資本主義的精神を破壞するものではなく、其の見解の或る者は無意識的に資本主義に有利なる作用を爲したことを認めてゐる。彼と雖も亦、淸敎主義が其の不俱戴天の

敵たる資本主義に奉仕せることを承認しなければならなかつた。（Der Bourgeois, a. a. O., S. 328.）。

五

人心の宗教的釋放は新大陸に於ける貴金屬の發見及び其の他の原因によつて喚起せられた貪慾心と結合して、近世的富の基礎を形成する經濟的資源の著大なる發達を來さしめた。而して又、中央俗界の權力が國民的經濟政策を遂行して、全國民の經濟的利益を擴張し、以つて其の政治的、軍事的目的に必要なる財源を取得しようとする時代は到來した。歐洲の强國は啻だに新世界に於ける自己の配分を取得するが爲めばかりではなく、其の國家的獨立の存在を維持するが爲めにも亦、戰はなければならぬか、若しくは絶えず戰ふの準備を行はなければならなかつた。這般の目的の爲めには海陸軍若しくは之れを急速に構成す得可き資料を有さなければならず、又、海陸軍政策の要求する船艦及び兵士を取得し支持するが爲めには、國家的收入及び流通貴金屬の高の不斷の增加が必要とせられた。而して、國內に貴金屬坑を有しない國家は、外國貿易に依賴するの外、他に金銀を取得する道のないものと觀ぜられた。國家的利害は宗教家の言說中に於いても漸次大なる注意を惹くに至つた。一千五百八十一年に出版せられたダブルユー・エスの對話篇中に現るゝ神學博士は諸職を分つて三種と做し、第一は金銀を國外に拉し去るもの、第二は單に其の取得したるものを國內に於いて費すに過ぎないもの、第三は金銀を國內に齎すものと觀、而して特に第三種のものを鼓舞奬勵するの必要を認めた。（昭和十八年版拙著『古版西洋經濟書解題』五三頁參照）。英國の代表的重商主義者トマス・マンは、其の關與せる東印度貿易が結局に於いて國內に巨額の金銀を齎すに至る可きことを主張し、國民は其の勤勉を以つて天惠を補ひ、所要の資料を缺くことなきを努め、貧民を扶持し、國產を增加し、互に相戒めて奢侈の風潮を抑制し、以つて國家の强大を圖る可きことを力說し、而して、「吾人は我が賢明なる政府が克く時弊を匡正し、神の稜威、國王の尊嚴、並びに國家の福利を發揚するに努む可きことを確信して疑はない」と述べて、其の一千六百二十一年の著『東印度貿易論』の筆を擱いた。（昭和七年版拙著『重商主義經濟學說研究』九〇頁參照）。

封建制度は貴族の有閑怠惰の生活を以つて唯り高貴なりと做すの觀念形態を築き上げた。封建の貴族は新興ブールジュワ階級を蔑視した。ブールジュワなる語には、上品なる貴族に對する粗野なる平民、豁達風流なる武士に對する鄙吝無趣味なる町人を暗示する輕蔑誹謗の意味が含まれるやうになつた。而も封建的貴族及び僧侶の政治的重要性は次第に減少して、國王と庶民の其れは增大した。彼れ等は十字軍及び自殺的內亂によつて凋落した。富裕なる商人は委棄せられたる封土を買收し、農業の方法を激變せしめ、中世基督敎國の傳統的村落制度を改變した。近世的國家はブールジュワ階級に依賴して其の大を致せるものであつた。斯くして、貪慾を以つて、あらゆる商企業の必然的基礎と看做して、之れを憎惡した中世的思想は漸次變化を來した。商人階級は、他國民との交易によつて國家の資財を取り扱ふの職に在るものと自信し、而して、其の任務を遂行するが爲めには、私利をして常に公益を伴はしむ可き十分なる練達と良心とを要するものであると做して自らを戒めた。（cf., Thomas Mun, England's Treasure by Forraign Trade, or, The Ballance of our Forraign Trade is the Rule of our Treasure, 1664, p. 8.）。

恰も、他人の勞働に基礎を置いた封建制度が總べての勞働を輕蔑するの觀念形態を生じ、斯くて又、其れ自體の存在に對する倫理的辯明を供給したと等しく、低廉なる貧民の勞働を利用し、國產を發達せしめ、輸出を增加し、輸入を抑制し、金銀の流入を誘致し、貨幣の增加を來さしめんことを期した重商主義的社會は往々にして貧困の效用と低賃銀の經濟を主張し、軈がて又、國家的富强を以つて唯り國民的生產の增加によつてのみ能く取得し得可きもの

と做し、斯くて又、其の思想體系中に於いて生産的勞働に對して極めて重要なる地位を與ふるに至つた。社會は勞働の上に基かしめられると云ふ概念は中世に於いても何等古代に於ける以上に行はれること無きものであつた。トマス・マンは富に二種あるものと觀た。一は自然的であつて、其の領土から生じたものであり、他は人爲的であつて。其の住民の勤勞に依存するものである。而して彼れは天惠の頗る薄い貧國も、其の國民が旭勉であつて、商工の道に勵んだならば、自然の富が豊かであつて而も人民の勤勞の足らない他國民に依つて富强を致す可きものと思惟した。(A Discovrse of Trade, From England vnto the East Indies: Answering to diuerse Objections which are vsually made against the same, 1621, pp. 49-50.)。彼れは又、技術によつて生活する人民を以つて、國王及び國家に取り、其の最大富强の基礎たるものと做した。(England's Treasure, op. cit., p. 31.)。人間の勤勉及び自然の資源を以つて、社會の物質的進歩に於ける二個の主要要素と觀るの思想は、第十七世紀後半の英國に於いては、幾多論者の間に共通のものとなつて居つた。(『重商主義經濟學說研究』七七―七七二頁參照)。Britannia Languens. の著者は、十分なる金銀財寶の蓄積が、人民の勤勞に依るの外、他に之れを取得するの道なきものと說き、(ibid., 1680., p. 238.)、ニコラス・バーボンは「人民は國家の富及び力である」と論じた。(Discourse of Trade, 1690, p. 55.)。チャールズ・ダヴェナントは、總べての國民の富は人民の勞働及び勤勞から生ずると述べた。(Discourses on the Public Revenues, and on the Trade of England, Pt. I, 1698, p. 17.)。而して、ベルナール・ヴ・マンデヴィルを以つて觀れば、政府の第一の注意は、人智の發見し得る限り、夥しく多種多樣の製造業、技藝及び手工を振興するに存し、而して、第二は其の總べての部門に於いて農業及び漁業を奬勵するに存す可きである。(The Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits. With an Essay on Charity and Charity-Schools. And A Search into the Nature of Society, 4th ed., 1725, p. 215.)。而して、彼れは又、「奴隷の承認せられることのない自由の國に於いては、最も確實なる富は出精なる貧民の多數に存する。蓋し、彼れ等は斷じて錯ることのない艦隊及び軍隊の養成所であるばかりでなく、彼れ等がなければ、如何なる享樂も存することを得ないであらうし、又、總べての國の如何なる産物も價値あることを得ないであらう」と說いて居つた。(ibid., p. 328.)。

斯くの如き思想に基いて、勤勞よりも懶惰を欲し仕事に從事するよりも寧ろ赤貧の境遇に在ることを選ぶ者に對して勞働の義務を强要すると共に、苟も勞働するの意志ある者は之れを無爲の境涯に放棄す可きものに非ずと做して、或ひは授産所の設立によつて貧民を就業せしめ、或ひは集團組織若しくは勤勞學校の設立によつて勞働貧民を其の能力の限度まで利用せんとするの計畫が立てられた。(『重商主義經濟學說研究』七〇〇―七四七頁參照)。

六

中世に於いては神の名によつて命ぜられた勤勞は、重商主義時代に於いては國家の名に於いて命ぜられ、而して又、前時代に於いては神の眼に於いて不善と看做された無用の贅物は、今や國家的見地よりして排斥せられることゝなつた。然しながら新たなる生命と勇氣とに蘇つた個人は、一切生活上の訓練を行はんとした宗教的努力を無效ならしめ、新たなる自己の道を求めようとして、强大なる近世國家の統制下に在りながら、猶ほ、往々にして只管功名心と利得慾の導くが儘に行動しようとした。斯くの如き傾向は又、當時の思想家の言說中にも現れなければならなかつた。國民生活上に於ける經濟的要素の重要なる所以を承認したニコロ・マキアヴェリは、活動に對する動機として自利の力と人間の欲望の不飽足性とを承認した。トマス・ホッブズは、私利を以つて社會に於ける眞の原動力と認めた。人類は全然滿足せしめられた心意の平靜に安んずることがない。若し、結局或る「窮極の目的」

(finis ultimus) 又は「最高の幸福」(summum bonum) なるものが存するとしたならば、そは無限に增加しつゝある欲望の永劫終止することのない滿足である。「幸福は一の對象から他の對象への欲求の不斷の進歩である。前者の得達は猶ほ後者への道に過ぎざるが故である」。(Leviathan or the Matter, Forme, & Power of a Common-Wealth Ecclesiasticall and Civill, 1651, p. 47.)。

而して、一方に於いては、ジョン・ボレックスフェンの如きは、賃銀の騰貴が怠惰の誘因なることを認め、(A Discourse of Trade, Coyn, and Paper Credit, and of Ways and Means to gain and to retain Riches. 1697, p. 47.)、又、かのマンデヴィルの如きは、「其の社會をして幸福ならしめ、人民をして最も下賤なる境遇の下に於いて安易ならしめるが爲めには、彼れ等の多數が貧困であると等しく、無知である可きことが必要である。知識は吾人の欲望を擴張し又增加する、而して、或る人の望む所のものが愈々少なければ、彼れの必要品は愈々容易に供給せらるゝを得可きである」と稱して居つたのであるが、(The Fable of the Bees, op. cit. p. 328.)、而も、他方に於いて、サー・ウィリアム・ペティの如きは、愛蘭の發達を見ない所以を以つて、天惠薄きが爲めではなくして、其の人民の所要物少なきが故に、交易の用意なきに坐するものと觀た。彼れ等は煙草を除いては毫も外國品を欲求することがない。內國商業の存しない所には、勞働に對する刺戟のあることがない。愛蘭の最大不幸は其の人民の營みつゝある日常生活の單純なるにある。彼れ等をして更らに多くを消費せしめ、從つて又、更らに多くを贏得せしめようとしたならば、彼れ等の間に奢侈の風習を生ぜしむるを可とする。そは軈がて九十五萬の庶民が光彩、機巧及び勤勉を增加して國家の大富裕を來すに至らしむ可きものである。(The Political Anatomy of Ireland, 1691, p. 83.)。

第十七世紀の效用價値論者ニコラス・バーボンは、あらゆる貨物の價値を以つて其の效用から發生すると做し、物の效用を以つて人間の欲望及び必要を滿足せしむるに存すると觀、而して、人類に固有なる二個の一般的欲望を以つて肉體的及び心理的の其れであると說き、而して、前者に備へるが爲めに有用なる貨物を以つて、生命を支へるに必要なる總べての物件、又、後者に備へるによつて其の價値を有する貨物を以つて總べての所願を滿足せしめることの出來る底の物件であると述べた。心意の欲望は無限である。人間は自然に仰望する。而して、彼れの心意が高揚すると共に、其の覺官は更らに優雅となり、更らに悅樂を感じ得るものとなる。彼れの願望は擴張せられ、而して、彼れの欲望は彼れの所願と共に增加する。稀少なるあらゆる物に對する其れは彼れの覺官を滿足し、彼れの肉體を裝飾し、而して、生活の安易、快樂及び華麗を助長することが出來る。(Discourse of Trade, op. cit., p. 14.)。然しながら、バーボンは結局に於いて、斯くの如き議論を進めて、足る者のみ富むとなす古代思想に復歸し、金銀のみを以つて唯り富若しくは財寶と做すの見解を排斥しようとしたのである。彼れに從へば、欲望と不足とは富と共に增加する。斯くて又、滿足せる人は唯一の富者である。蓋し、彼れは何物をも缺くことがないからである。肉體的不足を補足し、而して、生活を支持する物件は、眞正且つ自然なる價値を有するものと考へられ得可きである。是れ等のものは、あらゆる時、あらゆる場所に於いて價値有るものである。而して、若し、或る物件が其れ自體の中に內在的價値を有し得可しとしたならば、そは家畜及び穀物であらう。而して、金銀中に眞の內在的價値ありとなすの說は、彼のフリギア王ミダスの物語によつて辯破せられる。(A Discourse concerning Coining the New Money lighter. In Answer to Mr. Locke's Consideration about raising the Value of Money, 1696, pp. 2-4.)。バーボンの理論は又、商業に對する產業、正貨に對する信用の重要性が急速に增加しつゝあつた時代を反映

しつゝあるものとも稱せらるゝを得可きものである。

ジョン・ロックは認識論に於ける經驗說を確立した其の大著 An Essay concerning Human Understanding. 中に於いて、快樂及び苦痛並びに之れを招致せる善及び不善を以つて吾人の欲情の廻轉する樞機であると說いた。(ibid., II, xx. §3.)。而して、彼れに從へば、或る人が、或る物の現在の享得が、之れと共に歡喜の觀念を導く可きものゝ缺如によつて彼れ自身の內に看出した不安は、即ち吾人が「欲望」と稱する所のものであつて、そは不安の大小に從つて又、大小あるものである。人間の勤勞及び活動に對して主要なる（唯一ではないにもせよ）刺戟物たるものは不安である。(ibid., §6.)。あらゆる有意的行動に對する意志を直接解決するものは、或る缺如せる善の上に置かれた欲望の不安である。(ibid., xxi. §33.)。我が全智なる造物主は、人々に彼れ等自身を保持し、而して、其の種族を永續せしめるが爲めに、彼れ等の意志を發動せしめ且つ決定せしむ可く、週期的に再現する飢渴及び其の他自然的欲望の不安を與へた。單に是れ等のものを以つて抽象的に善であり、望ましいものと觀るのみでは、吾人の意志を決定し而して吾人を驅つて勞作せしめるに足らない。(ibid., §34.)。意志を決定するものは最大確實なる善ではなくして、不安である。富が貧に優つて居ることを知つても、而も、貧を以つて自ら足れりとする時は、之れから免れようとする意志を決定することがない。飲酒が健康上、又經濟上有害であることを知つても、而も、飲酒欲に對する不安の再現は酒徒を驅つて酒家に入らしめるのである。(ibid., §35.)、而して、彼れは「富」に對する欲望を、名譽及び勢力並びに習慣が吾人に自然なるものたらしめた其の他の多數の亂雜なる欲望と併置して、之れを幻想的不安と看做した。(ibid., §45.)。彼れは又、其の Two Treatises of Government, 1690. に於いて、神は彼れが世界をあらゆる人類に共同に與へた時、又之れに向つて勞働す可きを命じ、而して、其の境遇の窮迫は彼れから

して之れを要求したと說いた。(ibid., II. v. §. 32.)。實に、神は勞働を命じ、而して、人の欲望は彼れを驅つて勞働に赴かしめたのである。勞働は彼れの財產であつて、彼れが之れを何處に置いたとしても、彼れから奪ふことの出來ぬものである。斯くて、神は開拓を命ずるによつて、又、其の範圍內に於いて領有するの權を與へた。而して、勞働及び作業す可き資料を要求する人間生活の狀態は必然私的所有權を導入するのである。(ibid., § 35.)。斯くの如きロックの私有財產擁護論は、かの第十三世紀のスコラ哲學者ミッドルトンのリチャード (Ricardus de Media Villa) の影響を多分に受けたものと觀ることが出來る。リチャードは、「子を產むことのない物からは、何人と雖も、增加物を要求することを得ない、而して、貨幣は其れ自體に於いて子を產まぬ物であつて、そが增加物を產むことの出來るのは唯り斯くの如く之れを使用する人間の勞働と注意によつてゞある。是に於いて乎、其の勞働及び勤勞によつて增加を生ぜしめるものは人であつて、貨幣ではない、而して、人は彼れ自身の勞働及び勤勞に對する主人であるから、(quia homo dominus est sui laboris et industriae)、增加物は正當に彼れに屬して、貸主に屬することがない」と。(Sententiae, IV, distincto xv, questio 5, sexto queritur.)。而も、ロックは、其の利子論に於いては、「貨幣は子を產むことのない物であつて、何物をも生產しないが、而も、契約に基き、或る者の勞働に對する報酬として生じに其の利潤を他の者の懷中に移すのである」と做した。(Some Considerations of the consequences of the Lowering of Interest, and Raising the Value of Money, 1692, pp. 53-54.)。

個人的幸福が果して人間の努力の目的であり又目的でなければならぬとしたならば、或る人の欲望し追求する事物が彼れの幸福に奉仕するものと推定し得るやの問題が生じなければならぬ。ロックは、各個の有意的行爲の選擇に際し、意志を決定する諸般の不安は、一部は吾人の力の及ばない原因、例へば肉體的苦痛から生じ、他は誤つた判

定から生じた誤つた欲望から發するものと思惟した。(Human Understanding, op. cit., II. xx. § 57.)。而して、彼れは現世の善若しくは不善に關する吾人の判定は常に正當であるが、(ibid., § 58.)、而も、吾人の欲望が現在の享樂以外に超出し、現存せざる善に向つて心意を馳せしむるの時、(ibid., § 59.)、吾人は吾人の幸福の必要部分を形成する所のものに關して誤つた判定を下すことがあると觀たのである。(ibid., §§ 60-68.)。

然るに、幼時ロックの監督下に教育せられた第三世の伯爵シャフツベリィは、錯誤の可能性を啻だに現在及び將來の滿足間に於ける選擇に限定することなく、人は其の現在の選擇に於いてすら彼れに何等眞の幸福を齎すことのない事物を欲望することあるものと思惟した。ホッブズの利己說に反對して、倫理生活の目的を以つて、利己的及び社會的衝動間の均衡を保つに在ると做した彼れは、幸福を以つて欲求の不斷の進歩と觀たホッブスに對して、貪慾なる氣質が不幸であり、節制の實行及び其の結果が快適及び幸福であることを强調した。(Inquiry concerning Virtue, or Merit, 1699; Characteristics of Man, Manners, Opinions, Times, ed. 1732, vol. ii, pp. 155-156.)。

シャフツベリィの學說を展開せしめ又系統立てたフランシス・ハッチソンは、願望(desire)及び嫌惡(aversion)の如き意志の主要運動を以つて、あらゆる理性的行爲者に於ける活動の一般的原動力であると說いた。(A System of Moral Philosophy in Three Books, written by late Francis Hutcheson, LL. D. Professor of Moral Philosophy in the University of Glasgow. Published fom the original MS. by his son Francis Hutcheson, 1755, vol. I. p. 7.)。彼れは、勞働が富の大泉源であり、又、價値の眞尺度であることを主張するものであつて、而して總べての人は、公共の利益が別個の行爲を要求す可き場合を除き、個人の身體又は財產に對して毫も危害を加へることのない以上、如何なる仕事又は娛樂に於いても、自己の目的の爲めに自己の欲する所に從つて其の能力を行使する自然權を有するものと聲明する。然しながら、富若しくは權力の快感は行爲者が是れ等のものによつて滿足せしめんことを期する諸欲求若しくは諸感覺の滿悅に比例せられるが故に、是れ等のものは、單に奢侈若しくは外部的光彩のみを念とする者に對するよりも有德なる者に對してより大なる幸福を與へるものと思惟した。(An Essay on the Nature and Conduct of the Passions and Affections, 1728, ed. 1730, p. 154.)。而して、彼れは仁愛(benevolence)を以つて、あらゆる行爲に對して德的性質を賦與することの出來る唯一の動機であると做し、最も仁慈なる行爲は人民の最大多數の福利を目的とせるものであつて、自愛(self-love)は個人をして自己の幸福を注意せしめる外、他に何等の效果をも有することのない場合には無害であるが、而も如何なる程度に於いても、又、如何なる方向に於いても、斷じて有德なる行爲の動機たることを得ないものであると考へた。人間行爲の理想を是れに依つて誘致する「最大多數の最大幸福」に求める思想は、夙にハッチソンに於いて看出される。(Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue, 1720, sect ii. art. 4.)。

ハッチソンから著大なる感化を受けたデーヴィッド・ヒュームは、此の世のあらゆる物は、勞働に依つて購入せられる所であり、而して、吾人の諸欲情は勞働の唯一の原因たるものであると觀た。彼れを以つて觀れば、一國民にして製造業及び機械的技術に富む時は、農夫及び地主は一個の科學として農業を學習し、其の勤勉と注意とを倍加する。彼れ等の勞働から生じた過剩は失はれることなくして、今や人々の奢侈が彼れ等をして欲求するに至らしめた貨物に代へて製造業者と交換せられるのである。斯くて、土地は之れを耕耘する者に取つて充分なる高よりも遙かに以上に生活の必要品を給與するのである。そは平和靜謐の時代には這般の製造業者及び高等なる學術の研究者を維持するの用に供せられる。而も、國家は是れ等製造業者の多數を兵士に轉換せしめ、農夫の勞働から生じた

餘剰を以つて彼れ等を維持することが容易である。(Political Discourses, 1752, p. 12.)。彼れは又、他の機會に於いて、あらゆる物は熟練及び勞働に對して賣却せられると做し、(Essays and Treatises on Several Subjects, 1822, p. 132.)、而して、總べての人間の勤勞の大目的は幸福の得達であると說いた。(ibid., p. 133.)。彼れの所謂「勞働」は常に肉體的勞苦と等しく心知的の其れをも包含するものである。彼れに從へば、人は啻だに外界の自然に對するばかりでなく、彼れ自身の上にも亦、其の勤勞を導かなければならぬ。彼れにして若し自己を圍繞せる障害を克服しようと欲するならば、彼れは其の才能、心意及び肉體を改善しなければならぬ。ヒューム曰く「而して、同一の勤勞は吾人の心意の練磨、吾人の欲情の緩和、吾人の理性の啓發をして快適なる業務たらしめることを得ないか」と。(ibid., p. 135.)。彼れは、如何に正しい意味に於いても富に對する欲求を以つて斷じて社會の構成力と看做すことなく、寧ろ、是れを以つて調整せられ抑制せらる可き破壞力と觀て居つた。(A Treatise of Human Nature: being An Attempt to introduce the experimental Method of Reasoning into Moral Subjects, bk. III. pt. ii. sect. 2.)。彼れに從へば、幸福は理性に依るよりも、寧ろ、欲情の狀態に依存するものである。「希望と歡喜とに對する性向は眞の富であり、恐怖と悲哀とに對するものは眞の貧である」。(Essays, op. cit., p. 154.)。彼れは、快樂の生活が、業務の生活の如く長く存續すること能はずして、飽滿と嫌惡に到達するの傾向が遙かに大なるものであることを認めた。最も永續的なる娛樂は、總べて其の中に努力と注意との混和物を有すること、例へば、博戲及び狩獵の如くである。而して、概して、業務及び行爲は人生に於けるあらゆる大空虛を滿すものである。(ibid., p. 155.)。

七

「此の世のあらゆる物は悉く勞働に依つて購入せられる、而して、吾人の諸欲情は勞働の唯一の原因である」と云ふヒュームの思想及び用語は佛蘭西に輸入せられて、重農學派の頭首フランスワ・ケネーをして、其の一千七百六十六年一月の Réponse au Mémoire de M. H. sur les avantages de l'industrie et du commerce, et sur la fécondité de la classe prétendue stérile, etc., inséré dans le Journal d'agriculture, commerce et finances, du mois de novembre 1765. に於いて「不足 (besoin) のみが勤勞の父である」と云ふ語を吐かしめた。(Œuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay, par Auguste Oncken, 1888, p. 391.)。ケネーの經濟意見はロック、シャフツベリィ及び其の他の英國學者から受けた哲學上の演繹論に基礎を有すると稱せられてゐる。ロックを以つて政治的個人主義の父とすれば、ケネーは當さに經濟的個人主義の父として數へらる可き者の一人である。彼れは其の一千七百六十六年十一月の Journal de l'agriculture. 誌上に揭げた Sur les Travaux des Artsans. Second Dialogue. に於いて、「私は、あなたが、最大可能なる費用の減少を以つて、最大可能なる快樂の增加を取得するは經濟行爲の完成であることに同感である」と信ずる」と做してゐる。(Œuvres, op. cit., p. 535.)。而も彼れの經濟原理は其の哲學の上に愼重に構成せられたと言ふよりも、寧ろ之れに據つて支持せられたと觀ることが出來よう。而して、重農學派の體系は農業勞働に對するよりも、農業に對して適用せられる所の多いものであつた。而も、經濟科學の發達と共に、勞働は獨自の意義を收受するに至るのである。

アダム・スミスは其の『道德情操論』に於いて、其の師ハッチソンが、前述の如く自愛を輕視すること餘りに大なるを非難した。彼れは、吾人自身の私的幸福及び利益に對する注意も亦、幾多の場合に於いて頗る稱揚す可き行爲原理たるの觀あるものと做した。經濟、勤勉、愼重、注意及び著意の習慣は一般に自利的動機から養成せられた

ものと想像せられ、同時に又、萬人の尊敬及び稱揚に値する頗る殊勝なる性質であると考へられる。洵に、利己的動機の混入は、往々にして仁愛的感情から生ず可き行爲の美を汚辱するの觀がある。然しながら、彼れを以つて觀れば、其の原因は自愛が斷じて有德なる行爲の動機だることを得ないが爲めではなくして、仁愛的原理が、此の特殊の場合に於いては、其の相當なる强度を缺き、而して、全然、其の目的に不適當なるの觀あるに存するのである。社會の安寧福利に對する注意のみを行爲に取つて唯一の有德なる動機たらしむ可きものではなく、單に、あらゆる競合に在つて、そは諸他の動機に對して均衡を與ふ可きものとなるに過ぎない。スミスに從へば、神に關する場合は如何にあり得るとも、人間の如き不完全なる被造物であつて、其の存在を維持するが爲めに自己以外の物件を要求することの極めて多いものは、往々、諸他の動機から行動しなければならぬのである。(The Theory of Moral Sentiments, 1759, pp. 464, 466.)。

而も、スミスは固よりハッチソンより多大なる示唆を受けるものであつて、富と幸福とが必ずしも一致するものでないことを强調するに於いて其の師よりも詳密であつた。ハッチソンは、彼れが、富及び勢力の最大なる程度に依つて、其の所有者の幸福に對して小なる附加が爲されることに言及せるに徵して、效用遞減の法則を仄かに表明せるが如くであるが、而も「より小なる程度が彼れ等を同樣に幸福ならしめることがあり得るに拘らず、富を累積するの擧が如何に馬鹿氣てゐるか」と稱して居る點から觀れば、必ずしも這般の法則を體得せるものに非ざるが如くである。(An Essay on the Nature and Conduct of the Passions and Affections, op. cit., pp. 193-194.)。然るに、スミスは、健康であり借財を免れ而して淸純なる良心を有する者に取つては、財產の總べての增加は當さに餘冗と稱せらるゝを得可きであると說き、而して、斯くの如き狀態と人的繁榮の最高頂點の間に於いては、差違は些少に過ぎないが、之れと困窮の最低のどん底との間に於いては、間隔は莫大であり、非常であると做して、人が富一般、即ち總べての貨物を有することが極めて尠ない際には、一樣の增量は彼れがより富裕なる際に於ける其れよりも彼れに對してより多くを意味することを主張した。(ibid., pp. 97, 98.)。而して、スミスに據れば、吾人が其の富裕を誇示し、貧乏を隱蔽するは、人類が吾人の悲哀よりも、吾人の歡喜により完全に共感するの傾向あるが故である。衆目環視の中に吾人の困苦を露出し、而して、吾人の狀態が全人類の眼に曝されてゐるに拘らず、如何なる人も吾人の惱む所のものの半ばを吾人の爲めに心に懷くことがないと感じなければならぬほど無念なることはない。洵に、吾人が富を追求し、而して貧を回避するは、主として斯くの如き人類の情操に對する顧慮からである。(ibid., p. 108.)。スミスは富豪及び權勢家を嘆美する一般的氣風を是認することなく、是れを以つて吾人の道德的情操の敗壞と稱してゐる。(ibid., 7th ed., 1792, vol. i, p. 146.)。是れ等の事物が與へることの出來る眞の滿足は常に最高の度位に於いて蔑視す可きものであり且つ取るに足らぬものであるやうに見えなければならぬのであるが、人は斯くの如き抽象的哲學的見地に於いて之れを觀察することが稀れであるから、普通の場合に於いては、富及び權勢の快感は偉大、美麗且つ高貴なるものとして强く想像せられ、之れに到達することは、吾人が其の上に充用しようとする總べての勞苦及び心遣ひによく値するものと感ぜられるのである。(ibid., pp. 463, 464.)。

洵に、スミスは富の追求を以つて人間の側に於ける妄想の結果であると觀た。然しながら、彼れに從へば、神の仁慈と叡智とは永遠の古から常に幸福の最大なる高を生ぜしめるやうに廣大なる宇宙の機關を設計し指導した。(ibid., pt. VI. sect. ii. chap 3.)。神の攝理は、幸にして、人々が彼れ等に取つて利益あるものであらうと云ふ誤つた見解に於いて彼れ等をして富を求めしめる其の陷り易い迷想其の者が全體としての社會に役立つが如く作用する

やうに事物を配列したのである。自然が斯くの如くに吾人を瞞着するのは宜しきを得たるものである。人類の勤勞を激生し且つ絶えず之れを休止せしめないものは這般の欺瞞である。最初、彼れ等を鼓舞して土壤を耕作せしめ、家屋を建築せしめ、都市及び國家を建設せしめ、又、人間の生活を高尚ならしめ修飾する總べての學問及び技術を案出改善せしめるものは之れである。そは地球の全面を一變せしめ、天然の原始林を快適にして豊沃なる平野に變ぜしめ、而して、路なく實りのない大洋をして生存の新資源であり且つ世界諸國民の交通の大道たらしめたのである。(ibid., pp. 464-465.)。

而して、彼れは『國富論』に於いては、其の學說を分勞から出發せしめ、其の起原を人間本性の傾向、即ち或る物を以つて他の物と交換しようとする傾向に求め、人間が常に其の同胞の助力を必要とするを說き、而して、彼れは唯り彼れ等の仁愛のみに依つて之れを期待することを能はざるが故に、彼れ等が自己の利益を顧慮するの念に訴へて之れを得ようとするを論じた。(Wealth of Nations, 1776, vol. i, p. 17.)。彼れは又、あらゆる資本の所有者をして之れを農業、製造業、若しくは卸又は小賣商業の一定特殊部門の孰れに使用するかを決心せしむる唯一の動機は、彼れ自身の私的利潤の考察であると思惟した。そが是れ等の相異なれる方向の孰れに使用せられるかに從つて、其の發動せしめ得可き生産的勞働の相異なる量、並びにそが其の社會の土地及び勞働の年收益に附加することを得可き相異なる價値は斷じて其の資本所有者の考への中に入ることがない。(ibid., p. 456.)。あらゆる個人は絶えず、彼れの支配することの出來る如何なる資本に對しても最も有利なる用途を看出さんと努力しつゝある。彼れが企圖するは、洵に、彼れ自身の利益であつて、社會の其れではない。然しながら、彼れ自身の利益を念頭に懸けることは、自然に、否、寧ろ必然に、彼れをして其の社會に取つて最も有利なる使途を選ばしめる。(ibid., vol. ii, p. 32.)。あらゆる個人は單に彼れ自身の利得のみを企圖する。而して、彼れは、多くの他の場合に於けると等しく、此の場合に於いても、視えざる手に導かれて、毫も彼れの意圖を構成することのなかつた一つの目的、即ち社會の利益を增進するに至るのである。而して、スミスは、公共の利益の爲めに商賣を行ふことを裝ふ者によつて爲された多くの利益を未だ曾つて知ることがないと稱してゐる。(ibid., p. 35.)。

スミスの所論は又、萬有の本性の許容する生産に對する最强大なる刺戟であり、且つ最大なる生産に對して必要なるものを以つて之れを生産せる者に勞働の産物を悉く使用せしむるの保證であると主張する勞働全收益論者を産むに至つた。(『三田學會雜誌』第二十六卷第十號所載拙稿『賃銀學說史上の收益說』五〇〇頁以下參照)。

スミスは人間の全存在を專ら其の經濟生活の觀點から論述した『國富論』中に於いても、只管現實の社會を論じ、正常なる一般人の行爲を考察せるものであつて、決して彼れの批評家の言ふが如く、「利己」の假現たる「經濟人」を創造せるものではない。然しながら、以上の如き彼れの論述は、後年、正統學派の經濟學者等が「自愛」を「利潤追求」に改め、多數の動機を有する極めて複雜なる存在である人間を殊更らに單純化し、一定主要動機を諸他のものから解き放して「經濟人」を擬制し、是れに由つて抽象經濟理論上の諸法則を演繹し、需要供給の法則から社會的調和理論を引き出し、而して營利を以つて自動的、自整的にして且つ有利なる産業的秩序の推進力たらしめんとする理論の素地を作つたものと言ふことが出來よう。

八

單に自己の物質的利益のみによつて行動する抽象的人格たる「經濟人」の概念は、經濟的交易に關して可なりによく妥當すると云はれてゐる。「利己」は一般經濟の原理ではなくして、經濟的交易の原理であると稱せられる。

然しながら、這箇經濟的交易場裡に於いても亦、種々なる心理的、倫理的、社會的、國民的、宗教的及び因襲的要素が利己的動機の發動を抑制すること多きを認めなければならぬ。正統派の經濟學者と雖も、彼れ等が消費の問題を論ずるに當つては、彼れ等は決して經濟人が必然自己の個人的利益に資する物件の上にのみ其の取得し得たる富を費すものであるとは推定することがなかつた。經濟人と雖も、家族の爲めに、博愛的目的其の他の爲めに投費を行はんことを決意することが認められなければならぬ。生産論に於いては、富を欲求するの念に汎く對立する諸原理が承認せられなければならなかつた。アダム・スミスは、あらゆる人の私利心が彼れを驅つて有利なる仕事を求め、不利なるものを忌ましむ可きが故に、完全なる自由の存する所に於いては利益及び不利益は平等化する傾向の存することを認めるものであるが、而も、勞働の賃銀が仕事の難易、清潔不潔、名譽不名譽によつて相違する旨を說かなければならなかつた。(ibid., vol. i. pp. 121, 122.)。而して、不快及び不名譽は勞働の賃銀と等しき態樣に於いて資本の利潤にも影響する。(ibid., p. 123.)、洵に、財産の所有が一般的尊敬の基礎と爲ると共に、勤勞は高き尊敬を受けんと欲する者に對しては禁物である。而して又、人は自ら行ふことを欲せざる勤勞を直接他人より購入し、若しくは他人の勞働の結果たる貨物を購入するを得せしむるものとして富を欲求する。ジェームズ・ミルは、あらゆる吾人の快樂の大原因は其の同胞の勤務であると做し、而して、之れを取得するの手段として、勢力及び威嚴と共に富を擧げた。彼れに從へば、富は利益の媒介に由つて、服從を得る大なる手段である。總べての勤務の傭入は這般の媒介に由るものである。然るに、之れに反して、勢力は不利益の媒介に由つて勤務を取得するものである。而して、彼れは、恐怖によつて取得せられた服從の範圍は、希望に由つて取得せられるものよりも遙かに擴大せられ得可きものと觀た。或る人が他人の勤務に對して支拂ふが爲めに有する手段は、精々數千人に及ぶに過ぎないのであるが、一定の人々が恐怖に由つて他人に命令するが爲めに有する手段は、幾百萬に及んだのである。(Analysis of the Phenomena of the Human Mind, vol. ii, 1829, p. 166.)。

ジェームズ・ミルの「精神上の父」ジェレミィ・ベンサムは又、不平等なる財産を所有する二人の者の中、最大なる富を所有する者は最大なる幸福を有す可きを認むると同時に、後世の所謂「效用遞減法則」の作用を認めて、最も富裕なる者の側に於ける幸福の超過量は彼れの富の超過量の如く爾く大ではないであらうと說いた。(Principles of the Civil Code, Pt. i. ch. 6.—The Works of Jeremy Bentham, ed. by John Bowring, vol. i, p. 305.)。彼れは又曰く、「或る人によつて所有せられる幸福の量は、同一の人によつて所有せられる財産の量の如くではない。或る人が既に所有する財産の實體の量が愈々大ならば、一定の高まで、財産の實體の他の量の附加によつて彼れの收受する幸福の量は愈々小である」と。(The Constitutional Code, Bk. I. ch. iii. sec. 5.—ibid. vol. ix, p. 18.)。

他方に於いて、反スミス經濟學者ローダデールは、最も有用なる物品の量を增加するに由つて、吾人は屢々其の總交換價値を減少すると云ふ明白なる事實を注意した。(昭和十八年版拙著『古版西洋經濟書解題』四五四頁以下參照)。斯くて又、公の富と私の富との間に完全なる對立の存することが彼れによつて痛論せられた。(同書四六一頁以下參照)。次いで、ジョン・クレーグは、交換價値若しくは個人的富は、使用價値若しくは國民的富から愼重に區別せらる可きものであると做すローダデールの意見を考察し、而して效用が總べての價値の基礎たることを看出し、諸貨物の相對的價値が變化するものであり、而して、一定物品の主たる效用が依然として損傷せられることがないのに、其の生産額增加の爲めに、偶々之れを所有せる人々がより貧困と爲ることのあるのは否み難い事實ではあるが、而も、使用價値が此の點に於いて交換價値に對立すると論斷するは誤りであると論じた。(Remarks on

some Fundamental Doctrines in Political Economy illustrated by a Brief Inquiry into the Economical State of Britain since the year 1815, 1821, pp. 10-11.)。（前掲拙著六三二頁以下參照）。效用と價値との間に存する對立の問題は、全部效用と限界效用との間の差違が設けられるに至つて初めて解決の緒に着いたのである。

欲望の數及び種類の增加と、特殊欲望の飽足性とは漸次明かに認識せられるに至つた。ウィリアム・フォスター・ロイドは一般的生產過剩の問題と關聯して、財富獲得欲は現存欲望の滿足と共に擴張し行くものであつて、それは縱令ひ、絕對に無窮とは稱することが出來ないにしろ、少なくとも無定限と名附けられ得可きものであるが、而も、財富に對する熱望をして無定限ならしめ飽足せしめざるは欲望の種類及び之れが滿足に必要なる財貨の種類が無窮に多樣なるが爲めであつて、一定特殊の對象に對しては供給の增加は飽足を齎し、價値は消滅す可きことを說いた。(A Lecture on the Notion of Value, as Distinguishable Not only from Utility, but Also from Value in Exchange. Delivered before the University of Oxford in Michaelmas Term, 1833, 1834, pp. 7, 10.)。

軈がて願望の多樣性が注意せられることゝ爲つた。ナッソォ・ウィリアム・シィニィオアは、效用及び可讓性と並んで價値の三條件の一であり、其の中の斷然最有力なるものである供給の制限が價値に影響する主要泉源を以つて、人間性の最有力なる諸原理中の二たる多樣愛と卓越愛であると觀た。彼れは、生活の必要品は極めて少數であり、且つ單純であつて、吾人は是れ等のものに關しては直ちに滿足せしめられ、而して其の享樂の範圍を擴張せんことを欲求するを指摘した。「吾人の願望は明かに數量よりも多樣を目指すことの多いものである。總べて一定種の貨物の與へることの出來る快感には限界が存するばかりでなく、斯くの如き限界が到達せられる遙かに以前に於いて、快感は急速に增加しつゝある割合に於いて減少する」。(Encyclopaedia Metropolitana: or, System of Universal Knowledge: on a methodical plan projected by Samuel Taylor Coleridge, vol. vi, 1936, art. "Political Economy," p. 133; 3rd ed. of Reprint, p. 11.)。然しながら、シィニィオアは、多樣に對する願望は强いには强いが、卓越に對する願望に比すれば弱いものと觀て居つた。(ibid., p. 12.)。次いで、バンフィールドは「あらゆる等級の低い欲望の滿足は、更らに高い性質の願望を生ずる」ことを說いた。(T. C. Banfield, The Organization of Industry, explained in a course of lectures, delivered in the University of Cambridge in Easter Term 1844, 2nd ed., 1848, p. 11.)。

劍橋大學ツリニティ・コレッヂのリチャード・ジェニングスは又、「總べての貨物に關して、吾人の感情は、滿足の程度が消費せられる數量と步調を揃へて進むものではなく、是れ等のものは諸覺官に捧げられる其の貨物の各部分と等しく其の步を進め而して後に俄然停止するものではなく、却つて漸次減少して是れ等のものは終に消滅することを示す」と做して、「效用遞減法則」を表明した。(Richard Jennings, Natural Elements of Political Economy, 1855, p. 98.)。彼れは又、「不效用遞增」の事實を明示し、且つ其の作用が精神的勞働の場合よりも肉體的勞働の場合に於いて一層顯著なるものあることを注意した。(ibid., p. 120.)。

是れ等諸家の所說は、快感及び苦痛を以つて經濟微積分學の究竟目的たらしめ、人間の欲望滿足のカルキュラスとして經濟科學を改造せんとするウィリアム・スタンリィ・ジェヴォンズの企圖の路を開きつゝあつたのである。

九

之れと時を同じうしてヘルマン・ハインリッヒ・ゴッセンは、其の快樂主義の第一原理に從つて、快感の法則を探究し、「欲望飽足の法則」に到達したのであるが、然しながら、英國の經濟思想が概して合理主義的個人主義的方

向を取つて展開しつゝあつたに對し、獨逸の其れは理想主義的國民主義的傾向に進んだことが認められる。固より第十九世紀の初期以來、此の國に於ける經濟學說の發達は久しきに亙つて根本的には依然英國に依存せるものであり、同國のスミス學徒は其の師と等しく全能なる私的利己心の假定の上に國民經濟學の全堂宇を建設せんとしたのであるが、而も、ブルノー・ヒルデブラントの言ふが如く、英國スミス學派と獨逸に於ける其の分派との間には、前者が、私的利己心は常に自から必然に共同の福祉に導くと做すの原理から出發するに反し、後者は這般の原理を普遍的に承認することなく、斯くて又、共同の福祉を目的とする國民經濟的支配によつて人間の自利心の上に基礎を有する國民經濟を完成しようとするの相違が生じて居つた。（『三田學會雜誌』第三十七卷第三號所載拙稿『經濟學名著解題――一千八百四十八年版ブルノー・ヒルデブラント著現在及び將來の國民經濟學第一卷』八九―九〇頁參照）。其の著『封鎖的商業國家』に於いて、彼れの個人主義と國家間の妥協を經濟問題に適用せるフィヒテに取つては、國家の義務は、單に各員の所有する財產を防護するのみならず、又、須らく各員をして、共同勞働に對する其の貢獻が自然法によつて彼れのものたらしめた財產を獲得せしむ可きことを保證するにある。國家は其の成員の要求する所のものを彼れ等に與へるが爲めに積極的に行動しなければならぬ。而して、フィヒテは斯くの如く行動するの能力を有す可き理想的國家の組織を詳細に記述したのである。（『三田學會雜誌』第三十卷第一號所載拙稿『國民主義經濟學』一七―一九頁參照）。アダム・ハインリッヒ・ミューラーの浪漫主義的國民經濟學說は古典的經濟學の基性的學說を靈化せんとする丹念なる企圖であつた。彼れの國民經濟學に於ける根本思想はアダム・スミスに對する反動であつたが、而も、それは決して「盲目的な、敵意ある反動ではなくして、一の有意義な、屢々實際に補足的な其れ」であつた。（Wilhelm Roscher, Geschichte der National-Oekonomik in Deutschland, Zweite Aufl., 1924, S. 763.）。彼れの理想的政體は種々なる職能的集團が國家的有機體の成員たる中世的組合國家である。一社會若しくは一國家の經濟は集團を構成しつゝある個人の經濟の總和以上の或る物である。國民經濟の永續性を主張する彼れに取つては、生產力は富其の者よりも一層重要なるものである。（前掲拙稿二二頁參照）。ミューラーに負ふ所が甚だ多いと言はれてゐる國民主義經濟學者フリートリッヒ・リストは固より古典的經濟學說に反對の意見を表明してゐるに拘らず、或る意味に於いては寧ろ古典學派中に置かる可きものであり、資本主義的後進國獨逸に於ける、スミス及びリカードオの其れと等しき社會的基礎を有する理論的移行を代表するものと稱せらる可きである。彼れはスミスが大體に於いて生產諸力の本質を認知すること甚だ尠なく、彼れの攻究が物質的價値を創造する人間の活動に限定せられたことを非難するものである。彼れに從へば、之れに關してスミスは確かに人間の活動の生產性が「熟練及び明察」に依存することを認知してはゐるが、而も、這箇熟練及び明察の原因に關する其の攻究に於いては、彼れは分勞以上に歩を進めることなく、而して、彼れは唯り交換、物質的資本の增加及び市場の擴張に由つてのみ之れを說明する。而して、直ちに彼れの學說は愈々深く物質主義、自利主義及び個人主義に陷つたのである。彼れにして若し其の心胸を「價値、交換價値」の觀念によつて支配せしむることなく、「生產力」の觀念を追求したならば、彼れは經濟現象を說明するが爲めに「價値の理論」（Theorie der Werthe）の傍らに獨立の「生產力の理論」（Theorie der productiven Kräfte）を考察するの必要を會得するに至る可き筈であつた。（Das nationale System der politischen Oekonomie, Erster Band, 1841, S. 206―207.）。價値の學に於いては、靑少年及び成年の敎育者、名美術家、音樂家、司法官及び行政官の如き「生產力の生產者」は固より單に彼れ等の勤務が交換價値によつて報酬を與へられる限りに於いて考察せられることが出來るに過ぎないが、而も、吾人の考察が、苟も國民が

國際的若しくは全體的關係に於いて取り扱はれる際には、そは全然不充分であつて、狹隘且つ虛僞の意見に導くものである。(Ibidem, S. 215.)。

獨逸經濟學者は、英國其の他の諸國に於ける一部の經濟學者によつて等閑に付せられた經濟的動機の廣汎性を強調して斯學に對して寄與する所が大であつた。ジョン・スチュアート・ミルは彼れが一千八百三十六年十月の『ウエストミンスター評論』に掲げた經濟學方法論に於いては、經濟學を以つて、社會狀態によつて改變せられた人間本性の全體に就いて、若しくは社會に於ける人間の全行動に就いて論ずるものではなく、單に富を所有せんことを願望し、而して這般の目的を取得するが爲めの諸手段の比較的有效性を判斷することの出來る存在としての人間のみに關するものであり、唯り富の追求に因つて生起する底の社會的狀態の諸現象のみを豫言するものであつて、あらゆる他の欲情又は動機を全然除外するものと做した。唯だ例外として、富の願望に對する不斷の對抗原理と看做され得る所のもの、即ち、勞働に對する嫌忌及び現在に於いて費用大なる放恣を享樂せんとするの願望が或る程度まで算定せられるのみである。(Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, 1844, pp. 137-138.)。恐らく、或る人が單なる富の願望以外の何等かの衝動の直接若しくは遙遠の影響を受けてゐない彼れの生涯の行爲は存することがないであらう。富が主要目的ですらない人間の行動の部分に關しては、經濟學は其の結論が是れ等のものに適用せられ得ることを僭稱するものではない。然しながら、其處には又、富の取得が主要且つ承認せられた目的たる人事の一定部門が存する。經濟學が留意するは唯り是れ等のもののみである。(ibid., p. 139.)。ミルは經濟科學を以つて本質上「抽象」科學として、又其の方法を「先驗的」(a priori) として特性附けた。そは事實よりせずして、推定より推理し、又必然推理しなければならぬ。そは定義の名の下に他の抽象科學の基礎たるものと精確に類似せる假設の上に建設せられる。幾何學は「長さを有するも幅を有せざる」線の專斷的な定義の先在を要件とする。恰も同一の態樣に於いて、經濟學は、人間に關して、必要品、便宜品及び奢侈品の最大なる高を、是れ等のものが現存知識狀態に於いて取得せられ得る勞働及び肉體的自制の最小量を以つて取得し得るが如きことを何時も變らず行ふ一の存在としての專斷的定義を先在の要件とするものである。(ibid., pp. 143, 144.)。ミルは斯くの如き假定の上に愼重に且つ顯然と基礎を有す可き經濟學の原理を起草せんことを企圖したのであるが、然しながら、サン・シモン學徒の影響に依つては彼れは舊經濟學が極めて限定的であり且つ一時的の價値を有するの事實を知ることが出來た。(Autobiography, 1873, p. 166.)。斯くして、彼れは終に彼れが曩きに企圖せる經濟問題の抽象的論述を行ふことなく、寧ろ『政治的經濟學の原理、及び社會哲學に對する其の適用の或る者』を草せんとするに至つたのである。而して、彼れは此の著中に於いては、人間の唯一の動機が富の追求であることを推定する諸推論を然らざるものから硬直なる分界線によつて區劃せんとする何等の企圖をも試みることがなかつたのである。事實、彼れの經濟問題の論述は絕えず富に對する願望以外の多數の動機を考慮してゐる。然しながら、經濟的動機に關する彼れの論議は、英國經濟學者アルフレッド・マーシャルすら認めなければならなかつた程、彼れと同時代の獨逸諸學者、殊にヘルマンの其れに比して實質に於いて又方法に於いて共に劣つてゐる。(Alfred Marshall, Principles of Economics, vol. i, 5th ed., 1907, p. 783.)。吾人が他の機會に於いて述べたが如く、ヘルマンは實に自利心と共同心とに於いて經濟の二動機を看出し、而して、理論的國民經濟學を自利心の研究に、又、國民經濟政策を共同心の其れに基かしめんことをすら意圖したのである。(前掲『古版西洋經濟書解題』六〇七—六〇八頁參照)。

軈がて英國に於いても、トマス・カーライル及びジョン・ラスキンの如き獨逸浪漫主義的思想の影響を受けた者は、富の研究が全體としての生活の其れに結合せしめられなければならぬことを主張するに至つた。彼れ等は人間の勤勞に對する財富追求以外の動機を認め得たと思惟した。カーライルは仕事を以つて人間としての義務と說き、(Past and Present, 1843——Centenary Edition of the Works of Thomas Carlyle, 1896-1899, vol. x, p. 156.)、又、ラスキンは仕事の歡喜を叙した。(Sesame and Lilies, 1865——The Works of John Ruskin, ed. by E. T. Cook and A. Wedderburn. Library Ed., 1903-1912, vol. xviii, p. 97.)。ルヨォ・ブレンタノの如き獨逸歷史學派の經濟學者は又、古典的經濟學を古典的彫刻術に比し、後者が廣汎なる人間的特徵を表現するが爲めに個性を顧みざるが如く、抽象的人間の推定から演繹的に推論するものが古典派に屬する經濟學者であると做した。(Die Klassische Nationalökonomie, 1888, S. 2-3.)。經濟人の推定は社會倫理的並びに歷史主義的現實主義的批評に逢着しなければならなかつた。經濟學は「人間化」せられ、「人間らしい人間」(homo hnmanus) は「經濟人」(homo oeconomicus) に代らうとする。

經濟的動機に關する論議は更らに倫理的方面から知識的方面に移つた。經濟學の基礎は餘りに狹隘であり、餘りに實際生活の諸條件に接近せざるの憾みあるものであると考へられた。科學的合宜性は硬直なる體系に於けるよりも寧ろ變化しつゝある實在の更らに柔軟なる表出に存することが大であると云ふ信念が次第に增加した。是れ迄每々行はれて來たやうな經濟的動機の餘りにも靜的なる性質の假定に由つて果して論爭の全部が毀損されはしなかつたらうか、而して、今や機能的分析及び系統的理解の利益を拋棄することなくして立證せられ若しくは適用せられた理論の動的要素を承認するに由つて抵觸しつゝある諸意見を和解せしむ可き時機が到來したのではあるまいかと云ふ疑問が提起せられた。限界學派の理論を特徵附ける底の抽象が果して效果あるものであるか如何かが疑問とせられた。量的歸納的研究の更らに大なる使用が主張せられた。制度主義者に從へば、均衡概念及び限界的方法は一定の從屬的分析の目的に資するものと看做されることが出來るが、根本的に正しい經濟現象の說明は社會制度の本質及び長い慣習によつて生じた力に依據してのみ唯り可能である。

ジェヴォンズ流の快樂主義は閑却せられ若しくは全然拋棄せられるにすら至つた。快感及び苦痛理論は心理學者の間に於いて其の聲價を減少した。而して、個人的習慣及び社會的風習の如き要素が人間の動機として强調せられた。是に於いて乎、後期新古典學派若しくは限界學派に屬する有力なる學者中の或る者は斯くの如き心理學的假定の必要を回避することの出來る方法を以つて限界理論を表明せんとした。エッチ・ジェー・ダヴェンポートの如き限界學派の經濟學者に取つては、效用の總念中には何等快樂主義的願望理論の必然的含意も存することがないのである。疑ひもなく、此の語は快樂主義的內包を有する——返す返す遺憾なことである——而して、恐らく或る他の名辭によつて置き換へられ若しくは即座に廢棄せられることすら望ましいのであらう。一物件の效用は其の物件が願望せられると云ふ單純な事實を表明する一方法以上の何者をも意味するの要なく、又意味するものと解せらる可きではない。一の願望又は欲望が本能又は衝動若しくは經驗に遡るか如何かは欲望の存在に關する研究ではなくして、欲望の起原に關するものである。經濟學者に取つては、願望が存在すること、外物が引力を有することを以つて足れりとする。(Davenport, The Economics of Enterprise, 1913, p. 99.)、斯くて、經濟生活現象の實質的理解は拋棄せられ、而して、關係論又は均衡論は原因的發生的考察方法に代らんとする。然しながら、是れ等諸學者の理論と雖も、完全に心理的說明から脫却せるものではないと言はれてゐる。

輓近に於ける企業組織及び自由競爭制度に於ける著大なる變化は全知なる經濟的動機の概念に相應する何等かの實在が存するか如何かを疑問たらしめた。曾つてアードルッフ・ヴグナーは經濟的指導動機を分つて、利己的及び非利己的と做し、更らに前者を(一)自己の經濟的利益に對する渴望と自己の經濟的窮乏に對する恐怖、(二)處罰の恐怖と賞與の希望、(三)名譽感、他人の倫理的是認並びに恥辱及び輕蔑の恐怖を包含する認識に對する渴望、並びに(四)職業欲、活動の快感等に分ち、又、後者を倫理的行爲に對する內心的命令の衝動力、責任感の快味及び自己の內心的非難、即ち良心の苛責に對する恐怖であり、其の純粹なる形態に於いては「至上命令」として現れるものと做した。(Lehr- und Handbuch der politische Oekonomie, Erste Hauptabtheilung. Grundlegung der politischen Oekonomie, Erster Theil. 3. Aufl., 1893, S. 87.)。而して、輓近に至つて、ピィ・エッチ・ダグラスは經濟生活に於ける非商的動機の實在を論じて、人類に益せんとするの願望、仕事其の者の魅惑若しくは歡喜、手近かの仕事に自己の人格を具現せんとするの願望、同一活動範圍に於ける其の仲間によつて尊重せられんとするの願望、一般世人の尊重及び是認に對する願望、著名ならんとするの渴望、人及び物の上に支配力を有せんとするの願望を區別した。而も、斯くの如きものが其の全部を網羅するものでないことは言ふ迄もない所であらう。(R. G. Tugwell, The Trend of Economics, ch. v. P. H. Douglas, The Reality of Non-Commercial Incentives in Economic Life, 1924.)。

經濟表の生成發展

渡邊　建

一

「王國の凡べての他の職業を支持し、それに活力を與へ、商業を繁昌せしめ、人口を增加し、製造工業を活氣づけ、國民の繁榮を支持するものは、農業が常に年々再生產する其原始的富である」。(“OEuvres,” p. 215)と思考せるルイ十五世の侍醫フランスワ・ケネエ François Quesnay は『大百科全書』の『穀物』Grains の項に於て、先づ佛蘭西の農業の基本をなす耕作地の年々の收穫の計算を試み、富める小作人 Fermier によりて行はるゝ大規模耕作が、僅かに六百萬アルパンの土地に限られ、貧しき分益農 Métayer の小規模耕作にて三千萬アルパンが耕作せらるゝ現狀にては其播種を除く總收益は、穀物の輸出が禁止せられ穀價が下落せる當時にて、五億九千五百萬（久保田明光敎授は『近世經濟學の生成過程』一八九頁の註に六億百八十萬と訂正するが筆者が正確に計算すれば六億三百萬）リーヴルに過ぎざることを指摘し、(“Encyclopédie,” t VII, p. 816: “OEuvres” p. 203)祖國が眞に强大となるために、農業の重要性が社會全般に認識せられ、それに使用さるゝ人と富とが、賦役や課稅から免除せられ、而も其收穫が國の內外にて自由に取引さるゝことが許可せらる可きを主張し、斯くて佛蘭西の農業が再建せらるゝ時、